



TITLE:

子どもの同輩集団における社会的
相互行為に関する研究－西アフリ
カ・マリンケ農村社会の事例－(
Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

今中, 亮介

CITATION:

今中, 亮介. 子どもの同輩集団における社会的相互行為に関する研究
－西アフリカ・マリンケ農村社会の事例－. 京都大学, 2016, 博士(地域
研究)

ISSUE DATE:

2016-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19835>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（地域研究）	氏名	今中 亮介
論文題目	子どもの同輩集団における社会的相互行為に関する研究 —西アフリカ・マリンケ農村社会の事例—		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、子どもの同輩集団における社会的相互行為の分析を通じて、西アフリカのマリンケ農村社会における社会化と社会の再生産の関係を描こうとしたものである。</p> <p>第1章「序論」では、同輩集団における社会化に関する近年の理論動向と、西アフリカ・マリンケ農村社会において同主題を扱う意義ないし具体的な分析対象を論じた。理論動向の検討は、1980年代に現れた「コンピタンス・パラダイム」以前と以降とに分けておこなった。子どもを社会化の対象として捉える視座と分析上の個人主義的傾向への批判を受けて、同パラダイムでは子どもを社会化のエージェントとみなし、集団的な過程として社会化を捉えるために相互行為を分析する方針がとられた。このことにより、社会化を論じる諸分野において同輩集団が主要な研究対象として認められるようになった。また、西アフリカは異年齢かつ男女混合の子ども集団の活動が顕著であること、さらにその活動領域は西洋社会とは異なり、教育や生業など、遊びのみに限定されないことを示した。本論では、そうした多面的な活動領域を検討するために、共同労働組織トンの活動と寓話語りを分析の対象とした。</p> <p>第2章「子どものトンの変遷と経済活動の諸相：女性組織との比較から」では、調査村におけるトンの通時的な変遷と現在の経済活動について検討した。その結果、調査村では1990年代後半以降、村内の現金流通量が増加したことを背景として、子どもと既婚女性のトンが急増したことを明らかにした。また、現在の両組織の経済活動には、「現金を対価として共同労働をおこない、組織としてそれを貯蓄し、宴で消費する」という共通点がみられた。しかし、女性のトンが生活上の必要を満たすために営まれているのに対し、子どものトンは活動それ自体を楽しむことのみに目的性をみいだしうる点に差異が認められる。さらに、労働の報酬額を大人の干渉なしに設定するなど、子どものトンが子どもの自律的な同輩集団でありながらも、共同労働という明確な社会的機能を担うことで、コミュニティとのつながりを維持していることを示した。</p> <p>第3章「会議会話における発言権の構造と合意の方法」では、マリにおける「対話の伝統」論の論拠となったトンの会議の特徴について、発言権の構造と合意のされ方に注目して検討した。その結果、発話が「発言」と認められるためには常に他者に経由される必要があることを示した。また、合意が成立するには、沈黙という消極的な同意に加えて、繰り返しという積極的な同意も必要であることを指摘した。加えて、合意に関して</p>			

トンの会議に顕著な特徴は、全員の同意を取りつけるような議決点がなく、「決定らしきもの」は遡及的に捉えられるだけであるということを示した。子どもたちは、厳密な会議会話の作法に則って局所的なやりとりを重ねていくことで、そうした「発言」や「合意」を成立させていた。

第4章「子ども／大人であることをする：教育の場の制度化をめぐる成員カテゴリー化」では、トンが子どもの同輩集団でありながらも教育の場として制度化されていることを、トンにおいて頻繁に現れる「子ども／大人」アイデンティティのカテゴリー化実践の分析から示した。成員たちは教育の担い手である大人の不在を想像された「子ども／大人」アイデンティティを演じることで補い、周囲の大人はそうした成員間のアイデンティティを認識した上で、すでにトンに教育された＜大人＞としてその場を承認し、支えていた。このように、二重の子ども／大人関係対によって、トンはコミュニティとの明確なつながりをもちつつも、大人から一定の距離をおいた教育の場として制度化されていることを論じた。

第5章「ともに語ることを学ぶ：相互行為としての寓話語り」では寓話語りを分析した。具体的には、大人と子どものいる場での語りと子どもの同輩集団での語りを検討することで、相互行為を通じた学びのあり方を明らかにした。大人との語りのうち、大人の語り手が1人の場合、大人は子どもに語り手や聞き手を演じさせ、そこで子どもは試行錯誤をしながら語りに必要な要素を身につけていく。大人の語り手が2人以上いる場合、子どもは自らその場に適切な役割である聴衆を演じるとともに、子どもどうしで語られた山場を確認し合う。同輩集団の語りでは、「ともに語る」ことなどを通じて語りの方向性を付与し合う営みがみられることを指摘した。

第6章「結論」では、以上を総括した。子どもたちは特定の状況の中で、行為を相互に調整していくことで一定のルールのある活動を成立させていた。社会化はこうした相互行為の積み重ねとして捉えることができる。その際、彼らは年長者の活動を再現するだけでなく、集団的に探索・試行錯誤し、彼らなりの創造性を付与している。また、彼らは先代の活動を受け継ぎ、労働や教育によりコミュニティに資することで社会の再生産に寄与しており、大人はそうした活動を承認し、ときには補助することで支えている。

(論文審査の結果の要旨)

アフリカ社会において、「子ども」はその人口のうちの多くを占める。それにもかかわらず、アフリカ地域研究および文化人類学研究においては、「子ども」を真摯な考察の対象とした研究は最近になるまでほとんどなかった。こうした状況において本論文は、マリンケ社会における共同労働組織として知られてきた「トン(ton)」が近年子どもによって担われることが多くなってきていることに注目し、調査村におけるトンの通時的な変遷と現在の経済活動を明らかにするとともに、トンでしばしば行われる会議における会話の組織化のされ方の特徴、トンが子どもの教育に関して果たす役割、マリンケ社会における学びのあり方の特徴などについて検討したものである。

本論文の優れた点は、以下の3点にまとめられる。

まず本論文は、現代のマリンケ社会における共同労働組織トンのありようについて詳細な民族誌的記述を行うことに成功している。マリンケにおいてトンは「村落社会の縮図」といわれ、村落の公共領域に関わる共同労働や農作業、成員間の相互扶助を行うことを通じて近代化に寄与するものとして、植民地期以前から注目されてきた。しかし、かつてトンを構造化していた伝統的な社会制度が軒並み衰退の途をたどるなか、通時的な変遷を含めたトンに関する包括的な記述は欠落していた。こうした状況で本論文は、1991年のマリの民主化と前後して爆発的に増えてきた、子どもや女性たちによって営まれるトンの新たなかたちと現代マリンケ社会におけるその位置づけを明らかにした。

第2の優れた点は、会話分析や相互行為分析を援用して、トンを始めとする子どもの同輩集団における日常的な活動の精緻な分析を行ったことである。近年隆盛しつつある言語的社会化論やコンピテンス学派の研究では、どのように同輩の文化(peer culture)が作られ維持されるのかについての関心が高まっている。しかし、こうした研究が主要な分析ツールとする会話分析や相互行為分析は、高度な言語能力と膨大かつ緻密な作業を必要とするため、欧米やアジアの主要な言語圏以外での研究はほとんどない。これに対して本論文は、マリンケ語についての会話資料の詳細かつ忍耐強い検討から、例えば、それまで「伝統的な」もしくは「マリンケの」やり方をもつといわれてきた「発言」と「合意」が、どのようなやりとりの組織化によって成立しているのかを明らかにしている。これは言語的社会化論やコンピテンス学派の研究に数多くの貴重な事例分析を提供するだけでなく、その理論的な視座を改訂する可能性を秘めたものである。

上記の2点を組み合わせることによりマリンケにおける社会化と社会の再生産を統合的に論じていることが、本論文の第3の優れた点である。著者によれば、マリンケでは、子どもたちが同輩集団内で大人の社会関係や規範を模倣しそこに彼らなりの創造性を加えることで、また大人がそうした子どもたちの自律的な活動を承認し補助すること

で、社会化と社会の再生産が達成されてきた。こうした考察は、ミクロな相互行為の分析とマクロな社会理論を架橋し、アフリカ地域研究に新しい有望な領域を切り拓くものといえるであろう。

このように本論文は、マリンケ社会における子どもの社会的活動についての詳細な分析を行うことにより、アフリカ地域研究および文化人類学研究に重要な貢献を行った。よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また平成28年1月25日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。